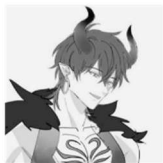


背徳エッチ♡

シスターなのに淫魔とのセックスで
心も体もとろとろになっちゃいました♡



ルカ

レイアを狙う淫魔（インキュバス）。
レイアが自分のちんぽでイキ狂うのが見ただけ。
いつの間にかレイア一筋。



レイア

山奥の教会で暮らす心優しいシスター。
毎夜見る淫夢に悩んでいる。

ぐちゅ♡　ぐちゅ♡　ぐちゅ♡　ずちゅ♡♡

「ンおッ♡　ほおお♡　おッ♡♡　ひ、う♡　ん♡♡♡」

「慌てないで。ほら、ちゃんとし子宮にもキスしてあげるから♡」

「おッ♡♡♡♡♡　ジ、ひいッ♡♡♡♡♡」

「ん、ッ……はあ♡　まだおまんこ終わらないから、大丈夫だよ」

聖堂に響く淫猥な水音と獣めいた自身の嬌声に、レイアの脳がビリビリと痺れる。股の間では絶え間なく巨大な肉棒が擦れ、狭い膣を抉り腹の奥に重たい衝撃と熱の塊を叩きつけていた。説教壇に手をついたレイアを後ろから揺さぶる男の声はずいぶんと余裕そうだ。

腰に回された腕はどれほど暴れてもびくともせず、大きな手のひらが破れた修道服からこぼれ出た豊満な乳房を無遠慮に揉みしだく。たん♡♡♡♡♡とリズムよく腰を打ち付けながら器用なものだと痺れる頭で考えていると、ひときわ大きなストロークで腹の奥を突き上げられレイアは野太い声を上げながら強烈な絶頂に襲われた。

「おッほおおお♡♡♡♡♡」

「ダメでしょ、おまんこ以外のこと考えちゃ」

「ご、ごめんら、しゃ♡♡♡　ひい♡　子宮、ぐりぐりしらいれえ……ッ♡」

ぐりゅ♡♡　ぐりゅ♡♡

狭い膣を押し広げるように腰を揺らしながら肉棒を奥へと押し込まれ、

レイアはたまらず懇願する。その様子がおかしいのか、小さく笑った男は上から覆いかぶさるように肉付きの良いレイアの体を抱き込み、さらに深く挿入しようと腰を押し付けてきた。

「がッ……♡♡♡ も、はい、にや、いい、のび♡♡♡」

「そんなことないよ。シスターの子宮口もちんぼの先端に吸い付いて、おいで……って言ってるもの♡」

男の荒い吐息が首筋に当たり、限界に近いことを教えてくる。その暴挙から逃れることもできず、腹を押し上げていた肉棒は数度奥を突き上げると、勢いよく子宮口に熱の塊を吐き出した。

「ほおッ……♡♡♡ ジッ……♡♡♡ おッ♡♡♡ おごッ♡♡♡ おおッ……♡♡♡ ツ♡♡♡」

ビュルッ♡♡♡ ビュルルルルルッ♡♡♡ ドプッ♡♡♡ ド
ピュッ♡♡♡ ビュクッ♡♡♡ ビュクッ♡♡♡ ビュルルッ♡♡♡ ド
ピュッ♡♡♡ ビュッ……♡♡♡ ドピュッ♡♡♡

尋常ではない量の精液が子宮に流し込まれ、下腹部が重たくなる。悲鳴すら上げられず、レイアは流し込まれる熱に脳を焼かれながら次々と襲い来る絶頂に身悶えた。

ごぷッ♡♡と肉棒と膈壁の間から子宮に入り切らなかった精子が逆流し、飛び出る音が響く。溢れ出た精液は愛液と共に太ももを伝い、ポタポタ

と聖堂の床に落ちて粘液質の水たまりを作り出す。

腹の中で脈打つまだ硬さのある肉棒がズリりと抜かれた。栓をなくしたばかりと開いた膣道から押し込められていた精液がドロドロと流れ出す感覚に羞恥心が煽られる。

「……かわいいね、シスター」

痙攣する腹を撫でていた手がレイアの顎をつかみ、後ろを向かせる。一見端正な顔立ちの美丈夫だが、青い髪から覗く鋭い角が二本。人ならざる金色の瞳がはちみつのように蕩けながら快楽に溺れる女の肢体を見下ろした。

「んッ♡ ぢゅ、む……♡ ちゅッ……♡」

指先でピンと勃った乳首を弄びながら分厚い舌を絡めながら器用に口内を蹂躪する男は、たっぷり数分もの間口づけを楽しむと銀糸を伸ばしながらゆつくりと顔を離す。ステンドグラス越しの月明かりに照らされる姿は、その所業に反しいつそ神々しさすら感じるほど美しかった。

「ああ……主よ……」

お許しください。無意識にそう懇願すると、男の目がとたん冷ややかに光る。

「はあ。頑固なシスター。そんなところも好きだけど、そろそろへし折りたくなっちゃうな」

彼の手に視界を覆われ——次に気がつくと、レイアは自室のベッドの中で目を覚めたのだ。



「あら。おはよう、レイア。今日も素敵な朝よ」

「お、はようございます……」

「あなた、最近お寝坊ね。早く準備しないとマザーに叱られるわよ」
先に行ってるわ、と言いつつ残し同室のシスターが部屋を出ていく。

(……今日もあの夢)

この一月ほど、毎晩とっていいほど見る淫夢に彼女は悩まされていた。毎晩、青髪の人ならざる美しさを持つ男が彼女を組み敷き蹂躪する悪夢。夢とは深層心理の現れであるとされてはいるからこそ、神に純潔を誓う身としてあつてはならないことだ。

(私も準備しないと。朝の礼拝に遅れてしまう)

あくまでもあれは夢だと思考を切り替え、ベッドから出るために身じろぎをした瞬間、ちゅくりと大きな水音が部屋に響いた。

慌てて起き上がりパジャマ代わりのワンピースの裾をたくし上げて下着を確認する。支給品の白い粗末なショーツは愛液でびっしょりと濡れそぼり、太ももにまで糸を垂らしていた。

(また……！ もう替えの下着がないのに……)

音の立つ下着を履いたままでいるわけにもいかず、諦めて下着を脱ぎ修道服に着替える。下着なしで出歩くなど本来あってはならないことだが、他の修道女から妙な顔をされるよりはマシだった。

着古された修道服はもう何年も使っているせいか、ところどころ生地は擦り切れて薄くなりサイズもあっていない。だが、子どもを含め女だけで暮らす人里離れた修道院で生活する分にはそれほど困りはしないのだ。豊かな生活でないことを誰もが知っているし、修道院の長であるマザーも目を瞑ってくれる。

（とはいえ、体のラインが出てしまうことは度々注意されてしまうけれど……）

それでも子どもたちが寒い思いをするよりいいのだ。そう言い聞かせながらウィンプルを被り、レイアは朝の礼拝のため急ぎ足で部屋を飛び出した。



「シスターレイア。少しこちらへ」

「はい、マザー」

朝の礼拝を終えたレイアが日々のお勤めである聖堂の掃除をしていると、修道院長であるマザーから声がかかる。顔を上げて姿勢を正したレイアがそちらを見ると、人の良さそうな老女が穏やかに微笑みながら近づいてきていた。

「お勤めご苦労さま。あなたにお願いがあるの」

「はい、マザー。どういったご用事でしょうか？」

「この子の世話を頼めますか？」

ほら、とマザーに促されて老女の背後から現れたのは、十歳ほどの少女だった。肩口で無造作に切り揃えられた特徴的な青髪と輝く金色の瞳にレイアは思わず後退りする。その様子を見たマザーは「レイア」と短く彼女の名前を呼び、窘めた。

「他の者は気味悪がっていて近づきすぎらないの。やってくれますね？」少女に聞こえないように声を潜めたマザー。少し間を置き、レイアはゆっくりと頷いてみせた。

「ああ、良かった。この子はルカ。ルカ、このシスターレイアが今日から

あなたの面倒を見てくれますからね」

「……はい」

小さく頷いた少女ルカはそろりとレイアの前へ出る。よく見ればきれいに整った顔は薄汚れ、服は継ぎ接ぎだらけのボロだ。よほどひどい生活をしていたのだろうと、先程までの恐怖を忘れレイアは彼女前に膝をつく。そして小さな体をそっと抱きしめた。

「ここは安全です。豊かではないかもしれないけれど、皆と平和に暮らしていきましょう。……これからよろしくね、ルカ」

「……はい、シスター」

「んッ……♡」

小さな手がそろりとレイアの乳房を掴み、そのままルカが顔を押し付けてくる。偶然にもルカの鼻先が布越しに乳首をかすり、思わず小さな吐息がこぼれてしまった。

幸いにもマザーやルカはそれに気づいていないようで、「そうそう」とレイアに話を続ける。

「子ども部屋のベッドに空きがないの。しばらくレイアのベッドで一緒に寝かせてあげて。他のシスターには私から伝えておきますから」

「はい、マザー」

頷いてみせるとマザーは満足げに微笑み、聖堂から立ち去った。ホッ

と胸を撫で下ろしたレイアは、ルカに向き直る。

「まずはお風呂に行きましょう」

ルカが頷いたのを確認し、レイアは彼女を連れて風呂場へと向かった。